

どこにでも神様 知られざる出雲世界をあるく

注目の 野村 進著



「出雲世界」にどっぷりとつかった身には、その特質はなかなか見えてこない。いろいろな顔を持っているのは確かだが、見えそうで見えない。むしろラフカディオ・ハーンのような風の人の視点で、外側から見たらその正体が少しは見

えてくるかもしれない。世界をあるく」と題された本書はそんな風の人である気鋭のノンフィクション作家が出雲の神社、境港の水木しげるロード、石見神楽公演を訪ねてきた。多幸感とは「不思議な、ほどよいぬるま湯につかっているような、えもいわれぬ感覚」とか。私たちの暮らす山

「多幸感のくに」をルポ

木しげるロードを通してみた水木しげる像、NHK紅白歌合戦に対抗する年越しの石見神楽公演。この三つの柱を中心に多幸感あふれる山陰の魅力

の一言すべてを訪ねた島根県立天講師のダスティン・キッドさんや3人の女子大生とともに、出雲大社をはじめ八重垣、神楽、美保、立石など出雲の神社を巡る。それぞれの神社でのキッドさんや女子大生の感想を紹介しながら、見えない魅力

を浮き彫りにする。著者は三つの柱のルポを通じて、出雲世界には「多幸感の空間」が広がっている、と説く。出雲世界との共存が図られている、と説く。出雲界(山陰)に暮らす私たちにとって、例外はあるにしてもほとんど納得できる指摘だと思う。出雲世界と限定されているが、それは過去の日本人の精神世界ともそっくり重なり合うのではないだろうか。

(岡部康幸・島根県立大非常勤講師)
(新潮社・1782円)

県が幼児教育指針

19年度中に初策定へ

保幼小連携、教育の質向上

県が幼児教育の指針となる計画を初めて策定する。保育園と幼稚園、小学校の連携体制の構築など具体的な取り組み内容を盛り込む。有識者らによる検討会の開催や、保育士や保護者を対象にしたアンケートを基に2019年度中の完成を目指す。

(平井優香)

県子ども・子育て支援課によると、17年度の県内の育児中女性の有業率は全国1位の81・2％で、県内の保育園に通う0歳児の割合は25・1％で全国平均の12

・9％に比べて高い。早期から保育園などに通う子どもも多く、県は18年度に松江、浜田両市に保育士や幼稚園教諭の研修を行う「幼児教育センター」を設置す

るなど幼児教育の質向上を目標としている。計画の項目は、保幼小連携▽地域や家庭との連携▽教育の質向上―などを想定。保幼小連携は、保育園

と小学校の連携体制が不十分で、小学校入学時に支援が必要な児童の把握が遅れるなどの課題があるため、具体的な連携体制づくりの方法などを示す。地域や家庭との連携は、地域住民との関わりや地域の自然との触れ合いなどを通じた「島根らしい教育」の在り方を提示する。

策定に当たり、保育園や幼稚園、小学校の関係者らでつくる検討会（座長・山下由紀恵県立大保育教育学科長）を設置。委員らへの聞き取り調査や、保育士や保護者らを行う実態調査を基に計画の細かい内容を詰める。

同課の多根純課長は「保育園や幼稚園から子どもの学ぶ力の基礎を培い、小学校にスムーズにつなげることが大切。現場が実践可能な計画をつくる」と話した。